

かずさの博物誌

バンの巣とヒナ ～夜間ヒナを抱くための巣～

文・写真／成田篤彦

2013.6.20

春に湿地の水路にバンがいた。冬は額が黄色だったのが、今は口紅のように真っ赤だ。シャッターを切ったとたんバシヤと水音をたてて飛び立った。農道を曲がると二羽のバンがアシ原の茎の間を縫うように歩いていった。「つがいができて、繁殖の準備に入ったのか？どこかに巣があるはずだ」と思った。

初夏に、舗装された農道の四つ角にあるハス田跡に、バンが一羽、大腿で歩いていった。比較的开けた水面のハスの茎の間に、枯れ草のかたまりがあった。「枯れ草がこんなからみ方をするのか？」と不自然さを感じた。

普段なら右へ曲がるところだが、



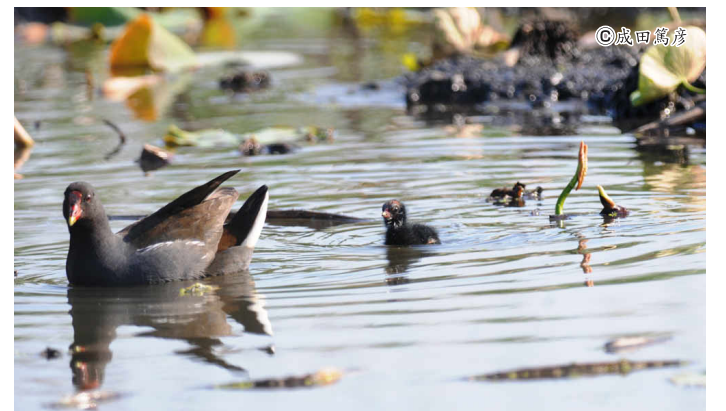
▲移動するバンの夫婦？=2013年4月14日 木更津市

真っすぐに歩いて横から見ると、数本のハス茎の根元に、アシの枯れ葉を高さ約十五cm、直径約三十五〜四十cmの皿状に積み上げてあった。水鳥の巣に間違いはない。念のために双眼鏡でのぞいてみた。なんとバンの真っ赤な額の一部分が見えた。すると先に見たバンは巣のバンの連れ合いか？と思った。バンの体色は真っ黒で、紅色の額が目立つ。巣は枯れ草の淡い灰褐色だ。対照的な色彩で、バンに気付くはずだが、巣に深く座っている親は意外と目立たない。

軽自動車や、犬を連れた散歩の方がこの農道をひんぱんに通るので、バンの親がそのうち危険を感じて巣を捨てるのでは？と考えた。それで、卵やその殻を見たいと思いつつも観察しに行つたが、いつも親がじつと動かずに座っていた。

ところが、五月十七日には巣には親も卵の殻も羽毛もなかった。「卵を産まずに巣を捨てたのか？」と思つた。

すると、二羽のペアのバンが道路のすぐそばにきた。何と三羽のヒナを連れていた。ヒナはまだ黒いぶ毛だが、頭が禿けていて赤い。予想を裏切つて、この巣で無事にヒナがかえつたのか？とも思つた。しかし、バンは抱卵用の巣だけでなく、夜間ヒナを抱くための巣もつくり、多い時にはなわばり内に五〜六個の巣をつくることもあるそうだ。その巣は開けたところにつくり、よく目立つという。だとするとこの巣はヒナを夜間に抱くためにつくつた巣かもしれない。それにしてもバンがこれほどヒナのために多くの巣を準備するとは思わなかった。



▲バンの親とヒナ=2013年5月17日 木更津市



▲巣に座るバン=2013年5月5日 木更津市



▲水路から飛び立つバン=ツル目クイナ科
=2013年4月14日 木更津市

memo

バン(鵞)

ツル目クイナ科

千葉県指定重要保護生物。体長三十二cm。湿地、水田などで見られる。オーストラリアを除く世界中の熱帯から温帯に分布。関東南部では留鳥。

千葉県では東京湾の埋め立てや河川改修などでヨシ原が消失し、巣作りの場所が減少。越冬期の数も減っている。五月頃から五〜十個産卵し、三週間ほどでかえる。ヒナは約三週間で自立する。植物の実を食べる。

参考文献

千葉県2011千葉県保護上重要な野生生物改訂版
千葉県レッドデータブック動物編